震災の前知と其豫防法

大沢 蛇 著

国立国会図書館

特118
67

昇龍堂主人著

震火災の前知と其豫防法

東京　昇龍堂出版

国立国会
51.8.16
図書館

特118
67

序

江戸三百年の文化を経、歐州文明の粹を蒐めて建設せられたる大東京の面目を、一夜にして、灰燼に歸せ令たる大正拾貳年の大震災、其惨狀眞に名狀すべからず、吾人の多くは安政の狀を審らかにする莫し、嘗て見る眼前一帶の焦土、何人か大東京の名殘りを指顧し得ん、此處に大廈の殘骸を數へ、彼處に橋梁の骨子を望む。徒に堆き焼土焉耳。武藏野の原に歸したりと曰ん乎、其狀、長りに惨分。隅田川は浮骸を以て堰れ、屍は隨所に山を作す。月光空しく惨禍の跡を照して鬼氣人に迫る。

是を天譴と唱ち之を天殃と數ずるとも、嗟夫二十萬の精靈將た何處にか瞑すべき、此を思ひ彼を念ふとき、斯る惨害は唯 天変地妖にして測る可らずと而已爲すべきか、之が觀測に從ふ理學

博士、地震博士と稱するの徒と雖も猶且知り得ざるか若し。昨夏四五月に亘りて帝都に強震ありし人心恟々たるの秋、余等は新聞紙上に公表し今後斷じて大地震無しと爲すべし。然るに半歲を出でざる裡に彼の大地震あり。以て余等は文明の賛物たるの誇りを免れざるに吊れり。然らば近代科學の力を以てしても豫知し得ざるなるべし。翻て吾陰陽の道を奉ずる者を眺るに、彼等は克く天地の秘奥を闡明す。故に吾徒は昨年五月易學雜誌に震災を豫言し用て警告を施へたり。是が爲、禍を轉じて福を獲たるもの一しとせず。

夫れ陰陽の道を究むるときは天機、亦稱すべし。此理により簡にして明、童幼も容易に行ひ得る前知法を示して汎く頒ふ徒らに天災地変は測るべからずとして歎ずる勿れ人事を本書により再悔を聊ざるべき者の本懷也。

大正拾參年貳月　昇龍堂主人　大澤蛇誌

震火災の前知と其豫防法

東京　昇龍堂主人大澤蛇著

第一章　地震の起る原因

地震の起る原因は傳說の上から言つても、亦學理上から言つても地中にあるものゝ地殼の不安定な局部に急激な変化が起つた時に地盤が震動するものゝ之に左の三種に區別するものゝある。

一、火山地震　二、陷落地震　三、斷層地震

第一の火山地震は火山の噴出に由り第二の陷落地震は地下水が地中の岩鹽、石灰岩、石膏等を溶解し地盤が陷落して起るもの第三の地震は斷層に基因するものである。就中斷層地震は震域も廣大で損害も亦激甚である。彼の明治二十四年にあつた濃美の地震は其長さ二十餘里で所によつては地盤に二十尺からの

喰い違ひを生じ、七千餘の生命を奪ひ二十八萬の家屋を倒潰焼失したが、又昨年の大地震は東京市中の八割を焼亡し壹百壹億五千萬円の損失をした實に怖るべきものである。

第二章　地震の前知法

第一節　易學上の前知法

破壞的の大地震は九星中の一白星と五黃星との年に起るものであります。此は一白の年には九星の天盤に大変化を生ずるのと、五黃の年には凶然の氣中すそに困るのであります之を實事に徴するに次の如く立證して居ります。

元和元年六月一日　乙卯　七赤の年
寛永五年七月十一日　戊辰　三碧の年
寛永七年六月廿三日　庚午　一白の年
寛永十二年正月廿三日　乙巳　五黃の年

正保　四年五月十四日　丁亥　二黑の年
慶安　二年六月二十日　甲午　四綠の年
慶安　二年七月廿五日　甲午　四綠の年
元禄　十年十月十二日　丁丑　六白の年
元禄　十六年十二月廿三日　甲申　八白の年
寶永　三年九月十五日　丙戌　六白の年
天明　二年七月十四日　壬寅　二黑の年
文化　九年十一月四日　壬申　八白の年
安政　二年十月十二日　乙卯　一白の年
明治　廿四年十月廿四日　乙卯　一白の年
明治　廿七年六月廿日　甲午　七赤の年
大正十二年九月一日　癸亥　五黃の年

以上の十六回は歴史に傳ふる所の大地震であつて、斯十六回中に最も

猛烈な破壊的なのが安政貳年と、明治二十四年(濃美の大地震)と昨年の激震とであつて、安政と濃美は何れも一白の年、大正の大地震は五黄の年、五黄の月であつて、何も安政も濃美迄が三十七年目濃美より昨年迄が三十三年目の年回に當つてゐる。(此年回といふのは十三年目、廿三年目、廿七年目、六十一年目の事で年回で推量してもわかる筈である)であるから、破壊的の大地震は一白の年と五黄の年月とに起るものと前知する事が出來る。此他の一白、五黄の年以外でも稀には大地震がないでもないがこれは必ず新暦の一、四、七、十月の節に起るものである

第二節　雉子に依る前知法

雉子がケンと鳴けば必ず大地震がある。と昔から言ひ傳へてゐるが此は事實であるから地震と系遠ふ人々は、雉子を飼養して前知するが宜しい。彼の地震博士と稱する故大森氏は此を否定してるが、論より證據雉子が鳴けば吃度地震があるものである。

第三節　大潮による前知法

毎年四月三日の大潮の日の潮工合が定刻通りであれば、其年は必ず地震はないものであるが、若し潮が乾て程なく滿て來るだらは其年には必ず大地震が有るものである之は漁夫の實驗に因るもので天文台や氣象台よりも餘程確なものである確實どころか眞に百發百中で安政の時も濃美の時も昨年のもそうであつた。であるから予は昨年四月十八日、旧三月三日の大潮に此を試みたが大潮だと言ふのに潮が干て唯の一時間程で滿て來たひう今年は必ず大地震の有る事を前知し、又九度は必ず大震は來、家のみ黄の年だから必ずあるものと悟り、大正拾貳年四月廿五日發行の『易學雜誌』五月號に「今年は地震があると豫言したやうな次第である。

第四節　波による前知法

毎年土用には土用波といふものが起るけれども大地震のある年には此土用波が決して起らぬものであるから土用波の無い年は必ず大地震があるしるしと前知する事が出来る。論より證據昨年は此波がなかつた。之は漁師がよく知つて居る海に密接な関係のある地震の事は天文臺の博士よりも漁師の方がよく知つて居るものである。

第三章　地震の豫防法

上述の如く地震を前以て知る事は容易であらう。而して之を知ると同時に直に此の豫防法を講ずる必要がある。けれども豫防すると言つたとて家或道具を力ずくに代る位のもので、大れも急場の間に合はぬ事がある。予の豫防法といふのはたゞ何より肝心要な生命の事である。先づ地震かグラ〳〵と揺り出したならば次に示す図の如く左の手の親指と中指とで両勝の脈を見て次に右の手の親指と中指とで左の手の手首(親指の下)にある脈處を押へて視勝と手首との脈が一

致して居る時に其時一に向ふ四時間内に如何なる大地震であらうとも決して怪我も死亡もするものではない。なぜ赤然自若不氣の平左で居るべきである。若し勝と手首と一致せざる人だらば夫こそ大変大怪我又は死の眠前に迫つゝある人だから直ちに立ても十丁でも距離へ避難して其處で再び實驗して見て勝と手首と一致すれば其處は安全である。若し依然たる一致せざるときは何處迄も一致する

第四章　火災の前知と其豫防

大地震に火事はツキモノである。押潰されるこゝりは焼死する方が

多い、故の敬服感歎で焼死した十餘萬の人々も、此秘法を知って居ったならばあのやうな無惨な目には遇はなかったうと思ふから、深秘奥傳であるが惜さず出に公開するから、よく覚へるがよい、此秘密奥傳は大概な易者は知って居たが、其証拠には平素大家であると威張って居た易者が昨年の地震で人焼け死んで居るではないか。これ程貴い法をやさしく秘密を傳へるのだから、よく覚へておいて、おのれも一身を守り、人にも教へて危難を免れさせて、或は又、テコと保険をかけて置て儲けるのも亦よかろう

前置は此位にしておいて、さて本文に取り掛れば火難を前知するには三つの方法がある、第一は九星の活動第二は人相に顕れるのだが此は素人には分り難いから、詳しくしるすやうな秘法を傳へやう、夫は次圖の如き赤線が左の手（男は右の手）の中指の中節に出顕すれば、其日に焼死又は類焼するものであるから、よく覚るがよい、尤も此は火災に

遇ふ十日前から出顕しこゝろるのだが色が薄いからよく分らないし、氣がつかないのだ。よくよく見れば誰にもわかる色の度合は十日程前に薄い桃色が赤のやうな線で、九日、七日、五日と日が迫つて来ると、次第に濃くなり、いよ〳〵當日といふ朝には真紅な絹色のやうな線となるものである、朝起が覚めたなりは寝床の中で頭のキレイな内に見るが宜しい、朝のし後やいろ〳〵な雑念の為に頭が濁ってしまって好く見えないものである

大正拾參年貳月拾四日印刷
大正拾參年貳月拾六日發行

正價金五拾錢

東京市麻布区森元町二十四番地
著作者　大澤蛇
發行者
東京市麻布区森元町二十四番地
印刷者　小田政二

不許複製
著者有權
印刷人權殿

發行所
東京市麻布区森元町二十四番地　昇龍堂
振替口座　東京　一五參參貳番

終